

第9回 人と自然：環境思想セミナー

茶の湯とは何か

別なるライフスタイルへの問いかけ

2008年
4月24日(木)
15:00 ~ 17:00
地球研 講演室

講師：熊倉功夫氏

(国立民族学博物館名誉教授・林原美術館館長)

主催：総合地球環境学研究所(地球研)

プロジェクト「農業が環境を破壊するとき」

申込不要・聴講無料

茶の湯とは何か

別なるライフスタイルへの問いかけ

「茶は常のことなり」 わが国の伝統文化の一つである茶の湯について古くから言いならわされてきた言葉です。侘び茶を大成した千利休を祖とする千家代々に伝えられ、一般に不断の稽古の大切さを説くものと解されています。しかしながら文字どおり受けとれば、この言葉は、茶の湯が何よりもまず「常のこと」、すなわち「日常」に関わることを端的に示すものでもあります。たしかに、狭く密閉された小間の茶室のすがたに見られるように、茶の湯は日々の雑事を離れ、雑念にまみれた日常から隔絶された「非日常」を旨としますが、それは日常を忘失することではありません。むしろ非日常なる茶の湯を通じて、日々の暮らしを相対化し、私たちの生きざまを問いなおす 「茶は常のことなり」とは、そうした茶の湯の意義を説くものといえるでしょう。いいかえると、茶の本質は、そのつどつねに「いま」の暮らしにアクチュアルに関わっていくところに存するといっても過言ではありません。

近年、地球環境問題の深刻化にともない、私たちの暮らしについても様々に議論がなされています。いたずらに環境に負荷をかけることなく、自然との調和をはかるためには、日々の生活はどうあるべきなのでしょう。今回は茶の湯のなかにその手がかりを探ってみたいと思います。（研究員・環境思想セミナー担当 鞍田 崇）



【講師】 熊倉功夫 KUMAKURA Isao

1943年生まれ。国立民族学博物館名誉教授。林原美術館館長。博士（文学）。日本文化史専攻。

主な著作に『近代茶道史の研究』（日本放送出版協会）、『寛永文化の研究』（吉川弘文館）、『茶の湯の歴史 千利休まで』（朝日新聞社）、『日本料理文化史 懐石を中心に』（人文書院）、『茶の湯のなかの民俗的要素』（『茶の湯研究 和比』第2号、不審庵）など。



今後の予定

5月23日(金)

「美学の沈黙：エコロジカルな美術史はあるか」(仮題)

グレゴリー・レヴィン氏 (カリフォルニア大学バークレー校 准教授)

6月13日(金)

「守・破・離：やきものの現在と自然」(仮題)

十五代 樂吉左衛門氏 (陶芸家・樂美術館 館長)

8月21日(木)

「千年の食卓：源氏物語の食材と料理」(仮題)

堀場弘之氏 (料理人・京料理「六盛」 社長)

会場：総合地球環境学研究所（地球研）講演室

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山475-4

烏丸線「国際会館駅」より京都市バス40系統「地球研前」下車スグ

叡山電鉄「京都精華大前」下車（徒歩約10分）

お問い合わせ 075-707-2382 kurata@chikyu.ac.jp